

アドルノとライル  
—イギリス滞在期間における  
アドルノの現象学研究と分析哲学との接点—

青柳 雅文\*

## はじめに

本稿では、Th・W・アドルノがイギリス滞在期間に従事した現象学研究を取り上げて、彼の思想形成について考察する。その際、彼が分析哲学者 G・ライルの助言を受けていた点に注目しつつ、ふたりの現象学理解についても比較検討する。

以下では、まずアドルノが新たな学位取得を目指し、論文執筆を構想した過程について紹介し、イギリス移住以前にドイツで提出していた学位論文との異同について考察する。その上で、アドルノがイギリス滞在期間におこなった現象学研究の構想と実際の見解について、ライルの現象学理解と比較しながら明らかにする。そしてアドルノの見解にライルがどのような役割を果たしているのかを検証する。

## 1. 新たな学位取得の構想

### 1-1 論文の執筆計画

アドルノは、1934年の秋学期からオックスフォード大学の「アドヴァンスト・ステューデント」として在籍することとなった。彼はすでに1924年にフランクフルト大学で学位を取得していたが、再度学位を取得するために、

---

\*立命館大学文学部非常勤講師

論文の提出を目指した<sup>1)</sup>。では彼はどのような論文を構想したのであろうか。

まずその手がかりとなるのは、アドルノが1934年10月4日付でオックスフォード大学に提出した「入学申込書」<sup>2)</sup>である。そのなかで彼は、研究題目を「エトムント・フッサールの「現象学的」哲学、とくに『論理学研究』、『純粹現象学への諸構想』、『<sup>イデー</sup>デカルト的省察』、『形式論理学と超越論的論理学』を手がかりとして」と記している。この題目からは、アドルノがフッサールの主著を取り上げながら、現象学を研究しようとしていることが明らかである。ただし、これだけではまだ彼の構想を具体的に知ることができない。そこで次に彼の構想の手がかりとなるのは、前述の申込書と同じ日付が記された1枚のタイプ原稿「学位論文執筆計画」（以下、「計画」）である<sup>3)</sup>。この「計画」は、9月末から10月初頭にかけて、イギリス理想主義者であり論理学者であるH・H・ジョアキムの助言のもとに作成された。それによれば、彼は論文の目的を「歴史哲学的観点から、フッサールの「現象学」の研究と批判にアプローチすること」であると記している。そしてこれによって、現象学の「根本的な問題をあらわにして、そこに含まれる矛盾を明らかにする」のと同時に、この矛盾が「必然的な起源を持っていること」を示そうとする。その上でアドルノは、考察すべき問題として以下の7項目を列挙している。

- (1) フッサールの「現象学的態度」（エポケー）の概念。
- (2) 「物自体」と「ノエマ」。
- (3) 「本質」と「本質直観」（「本質」と「本質の直観」、<sup>カテゴリー的直観</sup>）。
- (4) 「心理学主義」にたいするフッサールの態度における明らかな不一致。
- (5) フッサールにおいて「所与」とは何か、それはどのように与えられるのか（<sup>原始的に与える直観</sup>）。

- (6) 「フッサールにおける本質」のたんなる記述としての「存在論」概念と、哲学とは「超越論的体系」であるという彼の主張との不一致。
- (7) 彼が諸事実を（「本質」をも）たがいに孤立させていることと、体系的統一を主張することとの間の不一致。

「計画」は項目の列挙にとどまり、これらの項目に関するアドルノの具体的な主張が展開されているわけではないが、前述の申込書と比較した場合、この文書からは、彼が現象学のなかでもどのような問題を研究しようとしているのか、その方向性を窺い知ることはできるであろう。そして「計画」は、イギリスに滞在することになったアドルノが事実上最初に公にした研究の方向性であり、その意味で、実際の論文執筆の出発点になる文書だと言える。こうして彼は、異郷の地であらためて学位の取得を目指すこととなったのである。

## 1-2 構想と学位論文との異同

ところでアドルノは、「計画」において問題を列挙するのとともに、第2項目のところに次のような註を与えている。「この〔物自体とノエマという〕問題は、10年前に私がドイツで書いた学位論文の主題をなしていた。だがそれは、今回の論文の目的のためには、まったく異なる観点から扱われなければならないであろう」。この註は、構想中の論文と10年前に提出した学位論文「フッサール現象学における物的ノエマ的なものの超越」(以下、学位論文)<sup>4)</sup>との関係を示したアドルノ自身の言葉である。ここでまず明白なのは、彼が新たな論文の構想にあたって、再度フッサールの現象学を題材としたという点である。つまりどのような動機や事情があるにせよ、彼は学位取得のための哲学論文の題材として、10年前と同じフッサールの現象学を取り上げたのである。とはいえ、彼は以前と同じ論文を書こうとしているのではなく、それを「まったく異なる観点から」書こうとしている。それでは、彼がドイツ

で執筆した学位論文と、新たに構想された論文の「計画」との間には、思想的にどのような異同や変化が見出せるのであろうか。

まずはアドルノがドイツで提出した学位論文について確認しておこう。この論文は、当時の指導教員 H・コルネリウスの影響のもと、主にフッサールの『イデー』第一巻を手がかりとして執筆された。論文においては、「純粋な内在哲学の立場」から「フッサールの物自体の理論が吟味される」(GS1. 11)。アドルノは、フッサールが事物について、超越的なものと考えer 見方と意識に内在するものと考えer 見方をともに持っているとみなした。アドルノはこれを現象学のアンチノミーあるいは矛盾と呼び、論文では「こうした矛盾の発生を認識論の根源から把握し、その矛盾を批判的に訂正し、そしてその矛盾の諸帰結を体系的現象学の内部で示すこと」(GS1. 17) を目指した。この矛盾の解決のために、彼はコルネリウスに倣い、ゲシュタルト理論を手がかりとして、フッサールの主張の再構成を試みた。こうしてアドルノは、コルネリウスに依拠した純粋に認識論的で観念論的な観点から、現象学の内在的批判をおこなったのである<sup>5)</sup>。

これにたいして新たな論文の「計画」は、「歴史哲学の観点」にもとづいているという点で、学位論文とは決定的に異なっている。つまりアドルノは、学位論文と同じように現象学を題材にしながらも、10年の間にその観点を変化させているのである。ではこの変化はなぜ生じたのであろうか。その要因の可能性について検討しておこう。

まず要因として考えられるのは、「計画」を作成した際に、アドルノに助言を与えたジョアキムからの影響である。だがこれについて影響を認めることは難しい。アドルノは「計画」を大学に提出後、イギリスの「大学関係者救援協議会」事務総長 W・アダムスに宛てて手紙を送っているのであるが<sup>6)</sup>、そこにはジョアキムから助言を受けた彼の不安な心情が吐露されている。アドルノは10月26日付の手紙では、ジョアキムとの関係について、「われわれは実際うまくゆかないと思う」と述べている。というのも、彼の手紙によ

れば、ジョアキムは助言として英語力の改善をもとめ、それまではいかなる講義もしないと告げているからである。彼はジョアキムを「よき助言者」として、その意見を聞き入れなければならないとしながらも、その態度に不満を感じている様子が記されている。さらにアドルノは、自分の研究にジョアキムが理解を示しておらず、「私の哲学の仕事（もちろんそれは多くの点でオックスフォード・ヘーゲル学派と異なる）にも懐疑的であった」と述べている。このようにアドルノは、自分の見解がジョアキムに理解されていないばかりか、自分の語学力のせいで彼からの助言を拒まれているという事態に直面して、イギリスでの新しい研究生活にたいする大きな不安を抱いたと考えられるのである。直後の10月30日付の手紙では、「ジョアキム教授が十分に手助けしてくれている」と述べて、前向きな発言も見られるが、手紙の相手が、アドルノのイギリス移住を支援する団体の人物であったことからして、これだけで彼の発言の真意を判断することはできない。ほどなくアドルノの論文提出のための指導教員として、3歳年上のライルが担当することに決まる。その後、11月27日付の手紙では、ジョアキムよりもライルの助言に感謝する内容になっている。そしてジョアキムについては言及されなくなる。したがって、一連の手紙の内容からすると、ジョアキムからの影響を見出すことは困難なのである。

次に要因として考えられるのは、イギリスに移住する前にドイツで受けていた影響である。それは彼がS・キルケゴールを題材に教授資格論文を大学に提出し、私講師として教鞭を取っていた時期にあたる。たとえば彼の綱領的作品でもある私講師就任講演「哲学のアクチュアリティ」（1931年）<sup>7)</sup>のなかでは、哲学の意義として、「問いと答えとの歴史的な絡み合いからのみ、哲学のアクチュアルな問いが厳密に明らかになる」（GS1. 331）と述べている。ここでは哲学を歴史において問おうとするアドルノの態度が表明されている。またその翌年におこなわれた講演「自然史の理念」（1932年）<sup>8)</sup>においては、「歴史哲学的な問題意識から、自然史の概念についての展開を試み

る」(GS1. 346)と述べており、彼は明らかに歴史哲学的観点から考察しようとしている。これらの講演からわかるように、彼はイギリスに渡る直前には、「計画」と同様に、歴史哲学的観点からの議論を意図していたのである。このことは、すでにイギリスに滞在してときには彼の観点が変わっていたことを意味する。それは同時に、ジョアキムから助言を受けるよりも前に観点が変わっていたことも意味する。それではアドルノは、ドイツでどのような経緯で観点を変化させたのであろうか。その手がかりは、前述のふたつの講演のなかに見出される。つまりそれは、彼がそのいずれの講演においても、W・ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』を引き合いに出しているという事実である(vgl. GS1. 335 und 355 ff.)。アドルノがベンヤミンの影響を受けていることは、先行研究によって明らかにされているが、そのふたつの講演も例外ではない<sup>9)</sup>。歴史という問題に関して言えば、ベンヤミンは歴史的時間性を帯びたアレゴリー、星座、あるいは根源などの概念を用いて論じており、アドルノもそれらを積極的に自分の議論に援用している。したがって、このベンヤミンからの影響が、アドルノの現象学にたいする観点にも変化をもたらしたと言いうるのである。

以上のような要因もともなって、学位論文と「計画」との間では、アドルノの観点到変化が生じていた。それではこの観点到変化は、彼の思想そのものの変化を意味するのであろうか。言い換えれば、彼は学位論文での立場を完全に捨て去って、思想を転換させたのであろうか。その場合、観点到変化を境界線として、彼の思想形成の過程に一種の断絶が存在していたことにもなるが、はたしてそのように言えるのであろうか。もちろん、アドルノの観点到変化とは、コルネリウスの内在哲学からベンヤミン的な歴史哲学へと思想そのものが変わったことだ、と言うことはできるかもしれない。しかしながら、彼が学位論文では現象学の矛盾をその内部から批判的に考察することを目指し、「計画」では現象学に含まれる矛盾とその必然的起源を明らかにしようとしていることからして、両者には、彼の方法の一致が見出される

のではないであろうか。つまり、いずれも現象学の内部に矛盾が含まれているという認識があり、それを現象学自身の議論をつうじて内在的に批判しようとしているのである。その限りにおいて、「計画」ではまだ具体的に議論を展開していないとはいえ、現象学にたいするアドルノの立場と方法は一貫しており、彼の思想そのものが変化したというよりは、学位論文から「計画」へと連続的に展開していたとも言えるのである。

### 1-3 論文の主題設定、ホルクハイマーとの関係

ところで、アドルノによる新たな論文の構想は、大学へ提出された文書だけでなく、彼の私的な書簡のなかでも言及されている。とくにM・ホルクハイマーに宛てた書簡では、アドルノが関心を寄せている問題や、論文の構想の方向性が見出されるので、ここでいくつか取り上げておきたい。

まず1934年11月24付の書簡において、アドルノはフッサールの『論理学研究』第一巻における「学問の存在論化」、「論理学の物化、実践問題を隠蔽する「規範」の問題」、「心理学主義にたいする闘争の弁証法」(AHB1. 40)の分析をおこなうと述べた上で、次のように続けている。

[……] 現象学全体は、実際にはまだもっとも進歩的なブルジョア的認識論として展開されているように思われます。それは唯物論的論理学の一種の批判的 - 弁証法的序曲に譲り渡されるべきものです。論文は、この点についてあなたと緊密に関連しています。[……] (AHB1. 40-41)

さらに1935年2月25日付の書簡において、彼は論文の主題を「現象学のアンチノミー」、副題を「弁証法的認識論へのプロレゴメナ」と明言している<sup>10)</sup>。そしてこの論文が目指していることを次のように述べている。

[……] 現象学の内在的矛盾を自己解消にまで駆り立て、したがって同

様にあらゆる非弁証法的哲学（そしてさらには、こんにちもっとも進歩したブルジョア的認識論）を弁証法化し尽くすことです。そして次に積極的に取り掛かるのは、認識論の中心問題、つまり所与、普遍概念、主観 - 客観関係を弁証法的に定式化することです。これについては私は、私たちに固有の共通した理論的課題、すなわち弁証法的論理学の実際のプロレゴメナとして役立つことを望んでいます。その際、この課題をともに取り組んで行けると期待しています。〔……〕（AHB1. 56）

以上のようなアドルノの一連の発言からは、彼のふたつの態度が明らかになる。第一には、彼がフッサールの現象学を論理学の問題としてとらえようとしていることが挙げられる。これは以前の学位論文では見られなかった態度である。学位論文でのアドルノの態度は、フッサールからすれば心理学主義的であり、批判されるべき側にあった<sup>11)</sup>。だが今度は、フッサールの主張に沿うようにして、心理学主義を批判する側から現象学研究に取り組もうとしていると言えるであろう。前述のように、アドルノが学位論文とは異なる態度からフッサールの現象学を論じようとしていることが、この書簡からも裏づけられるのである。そして第二には、彼がいわゆるマルクス主義的な観点から、つまり唯物論的で弁証法的な観点から現象学を批判しようとしていることが挙げられる。この態度は、前述の「計画」にあった歴史哲学的観点とも結びついており、現象学を歴史の運動のなかで読み解こうとすることだと言える。またこの態度は、ホルクハイマーが主張する批判理論とも重なる。社会の実質的な問題を対象として理論的に考察することは、ふたりに共通する態度であったと言えるとともに、ふたりの影響関係も示唆しているのである<sup>12)</sup>。

アドルノは、新たな論文の構想のなかで、以前の学位論文と同じフッサールの現象学を題材としながらも、それまでとは異なる観点から取り組もうとした。そしてその関心は次第に限定され、実際の執筆作業に入ってゆくので



ある。この作業の過程でアドルノの思想形成に大きな役割を果たしたと考えられるのが指導教員となったライルである。次章では、アドルノの思想形成にライルがどのような影響を及ぼしているのかについて考察することにした。

## 2. アドルノの思想形成におけるライルからの影響

### 2-1 論文の題目変更申請

アドルノはオックスフォード大学に在籍中、論文の構想や主題を示す一方で、実際に執筆の作業に取り掛かっていた。作業の経過については、彼の書簡のなかから窺い知ることができる。たとえばホルクハイマーに宛てた1935年5月13日付の書簡のなかで、彼は次のように述べている。

〔……〕私の仕事は、ゆっくりですが変わらず進んでいます。フッサールについて多くのこと（『論理学研究』第六研究や新しい論理学 [= 『形式論理学と超越論的論理学』] の多くの箇所）があり、藪のなかを突き進むように進まなければなりません。〔……〕（AHB1. 67-68）<sup>13)</sup>

また同年5月26日付でクシェネクに宛てた書簡では次のように述べている。

〔……〕ここのところずっとカテゴリー的直観（本質直観）の概念分析を長々と書いていました。これについては純粹に論理学的な領域のもので、大まじめな分析に終始しているものですが、きっとあなたなら興味をもたれること請け合いと想像しています。〔……〕（AKB. 90）

さらに同年6月8日付のホルクハイマーに宛てた書簡では次のように述べている。

〔……〕 カテゴリー的直観の批判的分析を詳しく書いていました。これについては、あなたのお気に召すものになると強く思っています。  
〔……〕 (AHB1. 75)

この一連のアドルノの発言からは、ふたつのことがわかる。第一には、すでに主題設定の段階でも明らかであるように、彼がフッサールの論理学に注目しているということである。そして第二には、アドルノの研究する課題が次第に限定され、具体的な問題について作業するようになっていくということである。つまり彼は、フッサールの論理学的な諸問題の研究に取り組み、そのなかでも、とりわけカテゴリー的直観の理論に焦点をあてているのである<sup>14)</sup>。

さて、論文の「計画」の提出からおよそ1年を経て、アドルノは1935年11月9日付で論文の「題目変更申請」<sup>15)</sup>を大学に提出した。この申請書によれば、アドルノは新たな題目を「フッサールの現象学的哲学におけるカテゴリー的直観の原理」と記している。そして彼は変更の理由として、「論文の中心問題をより正確に特定するためであり、論文の題材が変わるのではない」と記している。彼はすでに書簡のなかで、カテゴリー的直観を論文の中心的な主題にするということを示唆していたが、それを申請書による題目の変更として明確に示してきたのである。

この申請書で注目すべきなのは、「題目の修正を推薦する」という指導教員ライルの所見が記されている点である。しかもこの申請書には、大学に宛てたライル自身による文書が付属している。この付属文書では、アドルノが届け出たのと類似した「『現象学的』哲学における知的直観と志向性の学説」という題目に変更すべきであると記されている。そしてアドルノも申請書のなかでは、ライルによる所見と付属文書を見るように指示している。以上のことは、ライルによる題目変更の助言を受けて、アドルノが申請を届け出た

と解釈することができる。あるいはどちらが主導的であったにせよ、少なくともライルがアドルノの題目変更に関与していることを意味している。したがって、アドルノが学位取得のために新たな論文を執筆する上で、ライルから影響があったと言うことはできるであろう。

なお、この申請書は、アドルノにたいするライルからの影響、ふたりの関連性をはっきりと示す数少ない資料である。もちろんライルがアドルノの論文執筆にたいする指導教員であったという事実だけでも、何らかの影響があったと推測することは可能であろう。だがふたりの間には、書簡や討議録など、その直接的な影響関係を示すものはほとんど残されていない。その意味では、ふたりの関連性が記録された申請書の存在は、非常に意義深いと言えるのである。

それでは、アドルノの主張や思想の内容面で、ライルからの影響関係は見出せるのであろうか。この点について、次節以下ではふたりの主張と現象学理解を比較することによって、アドルノにたいするライルからの思想の面での影響を明らかにしたい。

## 2-2 ライルの現象学理解とその妥当性

ライルは1920年代後半から30年代の初頭にかけて、現象学を集中的に研究していた。そして書評「ハイデガー『存在と時間』」（1929年）を発表し、講演「現象学」（1932年）をおこなうなど、積極的に現象学を論じていた<sup>16)</sup>。以下ではこの二作品を取り上げて、ライルの現象学理解とその妥当性について考察したい。

### 2-2-1 ライルの現象学理解

ライルによれば、現象学とは「本質に関する学」（CP1. 203）である。そしてそれとともに、「命題と同様に普遍あるいは本質も高次の対象であると考え」（CP1. 170）、「本質が存在し、われわれはそれを知ることができる」（CP1.

203) と考える「[「プラトン主義的な」論理实在論] (CP1. 202) である。このような立場から、フッサールは「[……]『論理学研究』第一巻では、心理学主義の誤謬を完膚なきまでに攻撃した」(CP1. 201) とされる。ライルにとってフッサールの現象学は、高次の対象としての本質を扱い、心理学主義を批判する論理实在論なのである。だがライルの理解はそれだけにとどまらない。彼は現象学を、「心的機能の根源的諸類型の分析」(CP1. 168) をおこなう「[「志向的体験」に関する学]」(CP1. 203) でもあると理解している。ライルによれば、フッサールにおける「[「心理学主義」からの解放は、「志向的体験」の類型分析という課題からの戦線離脱を意味するものではなかった」(CP1. 202) とされる。以上のようにライルは、フッサールの現象学を、論理的な対象の探究と、意識の志向的体験の分析という二重の観点を持つ立場として理解するのである。

### 2-2-2 ライルとフッサールとの「ずれ」

ライルの現象学理解がどれだけ妥当性を持つか、議論の余地はあるであろう。そもそもライル自身は、フッサールの現象学を論理的な関心から理解しようとしており<sup>17)</sup>、そこから現象学に二重の観点があるという帰結に至っている。この彼の理解は、フッサール自身の立場にかならずしもすべて合致するわけではない。というのも、フッサール自身の立場とライルの理解との間には、一種の<sup>ずれ</sup>が生じているからである。ここではそのずれについて、いくつかの概念を手がかりにして明らかにしたい。

まずは対象概念にたいするふたりの見解を比較しよう。フッサールの現象学においては、対象は意識の志向性と不可分である。彼にとっては意識の志向的体験の分析が中心的な課題であり、この意識とはつねに「あるものについての意識」である。そして対象は「あるもの」として、意識の志向的相関者、つまり志向的对象であり、どのような対象であれ、意識において把握されるのである。その一方でライルの考えでは、「われわれは「対象」を「事

物」の同義語として使う」(CP1. 175) のであり、対象は命題形式で表現される「諸属性の主語」(CP1. 171) であるとされる。ライルにおいて対象は、あくまで素朴に存在する事物として想定されており、論理的な命題と合致し、命題で表現される限りで、その対象の实在が妥当性を持つ。このように表現されたものを、ライルはフッサールになぞらえて「あるものについての知識」(CP1. 176) とも呼んでいる。このような彼の論理的な立場からすれば、対象となる事物は命題形式で表現される限りで存在すると言えるのであり、またその实在性は意識のはたらきに左右されるのではない。ライルはこのような立場にあるので、フッサールによる心理学主義批判を肯定的に評価するのである。だがフッサールの立場からすれば、ライルの言う意味での対象は、現象学的還元によって括弧に入れられるべきものということになるであろう。したがって、フッサールが対象を意識の志向的相関者とするのにたいして、ライルは対象を意識から切り離し、自然的に理解するのである。

このようなふたりの見解の相違は、本質概念についてもあてはまる。フッサールの現象学は本質学であり、事実学からは区別される。また本質も事実からは区別され、個別的な感性的直観に依拠することなくアприオリに把握される。そして本質は現象学的還元によって、純粹意識において把握される。この本質の把握は、感性的直観ではないとはいえ、それと類比的に直観されることでおこなわれる。したがってフッサールにおける本質概念は、純粹意識においてアприオリに把握されるものであり、彼による本質と事実の区別は、対象についてのどのような学問的方法や態度で把握するかという区別であり、対象についての形式的な区別とも言えよう。その一方でライルの場合、本質は「高次の対象」のひとつであり、個別的に存在し感性的に直観される諸対象から区別される。したがって、ライルにおける本質概念は、それらの個別的な対象とは次元の異なる対象のことであって、その区別はどのような次元の対象かという実質的な面でなされるのである。

以上のように、ふたりの間にはずれが生じていることがわかる。この点を

踏まえて、ライルの理解と批判がどれだけ妥当性を持つか、さらに検討することにしたい。

### 2-2-3 範例的直観をめぐって ——論理的錯誤と独我論の問題——

ライルは、フッサールの現象学におけるふたつの観点を結びつけるものとして範例的直観を挙げている。そこで、前節での比較も踏まえて考察することにしたい。ライルによれば、「彼 [=フッサール] の考えでは、個別的呢ものを知覚あるいは直観できるのと同じやり方で、われわれは本質を知覚あるいは直観できる」(CP1. 170)。そして現象学における「その主題は何らかの<sup>・</sup>実在的あるいは<sup>・</sup>想像的範例のなかに<sup>・</sup>直観的に<sup>・</sup>観取されるものとしての、<sup>・</sup>志向的体験の類型あるいは<sup>・</sup>類型構造だと言えるのであり、要するにその主題は<sup>・</sup>個体ではなく<sup>・</sup>本質であって、その方法は「<sup>・</sup>範例的直観」にもとづいている」(CP1. 203)。ライルにとって、現象学において主題となる本質を把握する方法は範例的直観であるとされる。この範例的直観とは、個別的对象にたいする感性的直観を範例として、高次の対象である本質を直観する方法であり、なおかつ意識の志向的体験において直観する方法である。そしてライルは、この範例的直観がフッサールのふたつの観点を結びつけるものであるとみなした。たしかにフッサールの場合には、本質をはじめとして、普遍概念やカテゴリー的形式なども、個々の感性的直観を範例として直観されるのであり、その意味では、ライルの見解とも合致しているように思える。しかしながら、前述の本質概念の場合と同様に、個々の<sup>・</sup>感性的直観と<sup>・</sup>本質直観が<sup>・</sup>区別されるのは、フッサールの場合には<sup>・</sup>意識において<sup>・</sup>どのように<sup>・</sup>直観されるかの<sup>・</sup>区別であるの<sup>・</sup>にたいして、ライルの場合には<sup>・</sup>何が<sup>・</sup>直観されるかの<sup>・</sup>区別である。本質直観にたいするふたりの理解にもこのようなずれがある。それゆえライルからすれば、フッサールによる本質直観は、つねに意識のはたらきを基礎においた方法であるように見える。前述のように、ライル自身は、対象を意識から独立したもの、素朴に存在するものと理解しているので、意識に

基礎をおこうとするフッサールの立場に疑問を呈する。というのも、「想像、欲望、信念、知識」などを含む意識にもとづいて、論理的命題によって「何らかの「諸属性の主語」が指し示されている」(CP1. 175)、つまり命題形式で対象が表現され、その実在性が示されているのだとすれば、たとえば想像された対象が実在することになるからである。意識に基礎がおかれれば、対象が実在するか否かにかかわらず、同じように論理的命題によって指示されてしまう。これをライルは「ほぼ確実に〈系統的に誤解を招く表現〉」(ebd.)であると指摘するのである。

ライルは、現象学がこのような表現を用いることになるのは、対象把握が意識に基礎づけられているからだと考える。彼によれば、現象学における対象は「名指すことのでき思考できる限りのものは何でも、潜在的にわれわれにとって存在する」(CP1. 203)のものであり、「潜在的に、私の意識の何らかの作用の客観的相関者あるいは志向的对象にほかならない」(ebd.)のものである。このような対象を、ライルは志向的体験の「対格」と呼んでいる<sup>18)</sup>。彼によれば、この「対格」としての対象は、「意識作用に特有の性格や本性のことであり、だからある作用の志向性は、その作用と別のものとの関係なのではなくて、その作用のたんなる一特性に過ぎない」(CP1. 175)。ライルからすれば、フッサールの言う「あるものについての意識」は、知ることだけでなく、「信じる、推測する、夢見る、切望する」(CP1. 176)などのはたらきも含み、このような意識が志向する対象は実在するとは限らず、またその実在性もあくまで意識にもとづいている。こうしてライルは、「志向性の学説が、〈心的機能のどの事例にも〔……〕、それに相関し、「志向的对象」として記述されうるような特定の何かが存在しなければならない〉ということの意味するものであるならば、この学説は誤っているように思われる」(ebd.)と指摘し、意識の志向性にもとづくフッサールの現象学が至った帰結について、次のように述べている。

フッサールおよびその追随者たちの哲学には、純化された主観的観念論あるいは独我論へすら向かってゆく傾向が見て取られる。その傾向は、私の見るところでは、私のよしとする現象学の理念によって必要とされたものではなく、たんに特殊な意味理論の一部分をとりわけ念入りに仕上げることによって生じたものに過ぎない。(CP1. 204)

フッサールは自分の哲学が独我論の一形態ではないと主張するのに苦心しているのであるが〔……〕彼の哲学は実際のところ、主観主義あるいは自我中心主義になってしまっている。(CP1. 172)

ライルは書評においても講演においても、フッサールの現象学における純粋論理学の構想を肯定的に評価する一方で、意識の志向性にもとづく対象把握には否定的に理解しており、しかもそれが独我論に帰結すると批判するのである<sup>19)</sup>。

以上のようなライルの現象学理解や批判は、フッサール自身の見解との間にずれがあるため、そのまま妥当性を持つとはいいがたい。たとえば、現象学的態度や志向的体験について、ライルの理解が十分であったとは言えないであろう。フッサールからすれば、ライルの理解は素朴で自然的だということになる。とはいえ、たとえ自然的だとしても、ライルの指摘からは、意識と対象との不一致が生じること、つまり両者の非同一性が示唆されており、そしてこの非同一性への自覚がなければ、現象学が潜在的に独我論に陥りかねないことが示されているのである<sup>20)</sup>。

### 2-3 アドルノの現象学理解とライルからの影響

アドルノはオックスフォード大学に在籍中、1937年に3月までに440頁に及ぶタイプ原稿を執筆した(vgl., AHB1. 329)。それがいわゆる「フッサール・ブック」と呼ばれる原稿の束である。原稿は8つの章から構成され、前



半の4つの章についてはまだ覚書にとどまっていた。同年、この原稿をもとにして、論文「フッサール哲学について」がまとめられた<sup>21)</sup>。以下では、この原稿および論文におけるアドルノの現象学理解を概観しつつ、ライルからの影響、そしてふたりの見解の異同について考察したい<sup>22)</sup>。

### 2-3-1 論理学の物化

すでに述べたように、アドルノはフッサールの現象学を論理学として読むことから始めていた。その上で彼はまず、「フッサールの学の理念は、論理学の物化を含んでいる」(TS. 2960)と指摘している。この物化とは、論理学が対象化されていることを意味するが、それと同時に、論理学が文字どおり事物のように扱われていること、そして論理学が実体的にとらえられていること、絶対化されていることも意味している。さらにアドルノは、「物化された論理学とは絶対主義的な論理学である」(ebd.)と述べており、現象学には論理絶対主義が含まれていると理解している。しかも彼は、フッサール自身がこの論理学の物化から脱出しようとしているとみなしている。アドルノによれば、フッサールにおける「物化された論理学から逃れる試みは、たんに論理学による事実存在への抽象的な関係を排除することであるだけでなく、それ以上に、哲学的省察にとっては経験的なものを根本的に放棄することであり、そのことが離在としてフッサールの哲学全体を一貫して支配している」(TS. 2960-2961)とされる。この引用からもわかるように、フッサールの試みは、論理学から事物的要素を排除するだけでなく、対象に関わる経験的なものと論理学とを切り離すことでもある。これによって「この〔経験的なものの〕放棄がもたらす直接的な帰結は、もちろん心理学主義にたいするフッサールの闘争である」(TS. 2961)とされる。

ところがこれと同時に、フッサールの試みによって、論理学がより純粋なものになり、よりいっそう絶対化されることにもなる。アドルノによれば、「『プロレゴメナ』は心理学主義を打ち倒したが、反対に論理学そのものを、

まるでその命題が意味をなさないかのように物化し、思考のはたらきからも、思考の素材からも引き剥がす」(GS20. 67-68)とされる。したがって、論理学の物化から脱出する試みは、脱出どころか、むしろ論理絶対主義の保持、論理学のさらなる物化という帰結をもたらすのである。

### 2-3-2 観念論からの脱出の試み

論理学の物化から脱出する試みがさらなる物化に帰結する、というアドルノの指摘と前述の引用からは、彼の現象学理解における別の見方が浮き彫りになってくる。つまりそれは、アドルノがフッサールの現象学を、意識中心主義という意味での観念論として理解しているということである。この理解にしたがえば、論理学の物化とは、論理を用いる意識からもその対象からも切り離されて論理学が実体化されることであり、そこから脱出するということは、意識の経験的な面を排除しつつ、意識において論理学を純粹に保持することでもある。アドルノにおいて、論理学の物化から脱出する試みとは、「観念論からの脱出の試み」(GS20. 57)あるいは「概念の物神崇拜から脱出する試み」(ebd.)でもある。この試みは、一方で観念論の自己批判として肯定的に評価されうるが、他方でやはり論理絶対主義を保持するという帰結に至る。アドルノは次のように述べている。

一方にフッサールは、〈理性真理〉、命題それ自体、純粹な妥当の統一を見ており、他方で正当性を証明する意識内在、所与性の領域、諸体験を見ている。両者は現象学全体を貫く裂け目で分離されている。前者が「本質」であり後者は「事実」である。(GS20. 69-70)

このように、フッサールによる脱出の試みは、論理絶対主義を解消するどころか、むしろそれを保持し、しかも意識において論理的なものや経験的なものの、本質と事実との分裂状態を引き起こすことになるのである。

ところで、以上のようなアドルノの議論に、ライルからの影響は見出せるであろうか。すでに明らかにしたように、論理的な問題関心から現象学研究に着手しているという点では、ライルからの影響を認めることはできる。実際の議論の内容に目を向けると、フッサールにおける二重の観点というライルの指摘については、アドルノも似たようなことを論じているように見える。つまり、論理的なものと経験的なものが切り離されていることである。しかしふたりの見解には異なる点もある。たとえばライルは、アドルノの言う論理学の物化を想定していない。ライルが考える論理学や対象概念は、アドルノにとっては物化されていると批判されるものである。むしろアドルノの立場は、意識との関係において論理学も対象概念も理解しようとしている点で、ライルよりもフッサールに近いと言えるのであろう。

### 2-3-3 カテゴリー的直観をめぐって ——非同一性と独我論の問題——

さて、アドルノは、フッサール自身がカテゴリー的直観<sup>23)</sup>の理論によって前述の分裂状態の解消を試みていたと考えている。そこで、この理論をめぐるアドルノの理解について考察しよう。

アドルノは、フッサールにおいて「真理それ自体」、つまり客観的にあらかじめ与えられているが理想的でもある諸事態は、「たんに目を向けること」によって洞察されること、これがカテゴリー的直観の教説の核心を形成する」(GS20. 68)と述べている。これはアプリアリな事態を、経験的に直観するのと同じようにして直観することであり、アドルノからすれば、「カテゴリー的直観の学説の機能は、絶対主義者フッサールが想定するような〈理性真理〉に、実証主義者フッサールが認識の唯一の権原とみなす直接的所与の性格を持たせようとするということである」(ebd.)。このような相異なるものを結びつけようとするという意味で、カテゴリー的直観は「逆説的統一」(GS20. 69)なのである。とはいえ、たとえ逆説的であっても、カテゴリー的直観によって前述の分裂状態が解消できているのだとすれば、観念論の自己批判、

「観念論からの脱出の試み」は成功するようにも思える。だがアドルノは、このカテゴリー的直観も、論理学の物化から脱出する試みと同じ帰結に至るとみなしており、それについて次のように述べている。

主観性と真理の非同一性、それを本来、カテゴリー的直観の構想は目指していた。しかしその構想の失敗が必然的なのは、この非主観的なもののほうが純粹主観性のカテゴリーのなかへと入ろうとするが、結局この純粹主観性のほうへと呼び戻されるからである。つまり非同一的な事態は意識の直接的所与性になる。しかしこうした事態の事実存在は理念的存在になり、それ自体で最終的に純粹な思考の機能と合致することになる。(GS20. 81)

この指摘は重要である。前述のように、フッサールにおけるカテゴリー的直観は、論理的なものや経験的なものとの分裂を解消し、統一するものと考えられていたのだが、その統一を主観性の側で純粹に保持することで実現させようとしていた。だが実際には統一できずに分裂状態に帰着していた。ところがアドルノは、このような結果に至ることこそが、フッサールも気づいていないカテゴリー的直観の理論に本来あった目的なのだともなしている。この分裂状態によって、主観性と論理的なものや経験的なものとの非同一性が自覚させられるからである。論理的なものも経験的なものも、主観性の恣意的なはたらきとは異なるものをつねに含んでいるのである。ところがフッサールの現象学においては、最終的にその主観性に基礎をおかざるをえないことになる。それゆえフッサールによる「観念論からの脱出の試み」は、「一度観念論の中心概念——超越論的主観性の概念——を想定したならば、この主観性に従属しないで、厳密な意味でその所有物でないものは、何も考えられない」(GS20. 52-53) ことになる。アドルノは、フッサールにおけるカテゴリー的直観の理論が意識中心主義に立ち戻らざるをえず、「独我論的超越

論主義」(GS20. 49)に至ると批判するのである。

#### 2-3-4 アドルノとライル

前章で明らかにしたように、アドルノは論文の題目変更を申請した際、「論文の中心問題」としてこのカテゴリー的直観を位置づけた。そして彼は実際に「フッサール・ブック」や「フッサール哲学について」のなかでこの問題を論じていた。フッサールにおける直観の理論が、現象学それ自体に含まれる問題点を解消する方法として機能すると考えた点は、アドルノとライルに共通している。また、いずれにしても現象学が独我論的な立場に陥るとみなした点でも、ふたりは似たような結論になっていたと言えよう。

ただし、対象概念や意識概念・自我概念について、ふたりの理解は異なっている。この点に関して言えば、アドルノはライルよりもフッサールに近い見方であった。アドルノは、フッサールと同様に意識と対象との関わりのなかで認識のあり方を問うていたからである。ライルの場合には、フッサールの超越論主義にたいする理解が十分であったとは言えず、あくまで個別的な意識概念のもとで、対象概念を排除した意識中心主義として現象学を理解していた。アドルノとライルでは、現象学理解に相違が見られるのである。

その一方で、アドルノとライルがともに現象学の独我論的性格を指摘したということは、ふたりが意識と対象との非同一性を見出していたからである。ふたりはともに対象を、意識にはとらえきれないものを含んでいるとみなしていた。その限りでふたりの理解は共通している。さらに言えば、この非同一性について、アドルノが論理的観点から探求したことは、イギリス滞在前には取り込まれていなかったことであり、その点では、イギリス滞在やライルとの関わりは一概に無視できないのである。ただし、ライルはこの非同一性を素朴に理解し、意識と対象との関係を外在的にとらえていたのに対して、アドルノの場合には、現象学に内在する非同一性を指摘しつつ、

それを捨象するかたちで独我論が形成されている点を批判している<sup>24)</sup>。このアドルノの批判の方法は、ライルともフッサールとも異なっている。アドルノは、フッサールの立場を批判的にとらえつつも、フッサール自身の議論のなかに、彼の意図とは異なる観点を見出そうとしている。とくに論理学の物化を批判的に論じるなかで、素朴に存在するのでもなければ意識に完全に回収されるのでもないところに、対象となるものを見ようとしている。この対象概念にたいするアドルノの姿勢は、意識との関わりにおいてとらえようとする点でフッサールの点であり、意識に回収されないものとして理解しようとする点ではライルの点でもある。そこには、学位論文以降、いくつかの変遷がありながらも一貫しておこなわれてきた現象学の内在的批判というアドルノ独自の視点が浮き彫りになってくるのである。

## おわりに

本稿では、イギリス滞在期間におけるアドルノの思想形成について、ライルからの影響関係を含めて考察した。彼は、かつてドイツで提出した学位論文とは異なる観点から、学位取得のために新たな論文執筆を構想した。この新たな論文の構想に影響を及ぼしたのがライルであった。アドルノにとって、異郷の地で新たに研究活動をおこなう上で、ライルとの出会いはその動機づけとなったに違いない。そのなかで、アドルノ独自の思想が形成されることになった。アドルノは、イギリスに約4年滞在したが、結局論文を完成させることはなかった。だがこの時期の彼の現象学研究は、後年『認識論のメタ批判 フッサールと現象学的アンチノミーに関する諸研究』(1956年)の刊行に至るまでの基礎として位置づけられる。したがって、アドルノの思想形成にとって、イギリスでの研究生活やライルとの関係は無視することができないものなのである。

## 註

- 1) アドルノがドイツを離れてイギリスに滞在することになった経緯や、新たに学位取得が必要になった事情については、以下の著書や伝記的研究が詳しい。Vgl., Stefan Müller-Doohm, *Adorno. Eine Biographie*, Frankfurt am Main, 2003; Andreas Kramer und Evelyn Wilcock, "A Preserve for Professional Philosophers": Adornos Husserl-Dissertation 1934-37 und ihr Oxfordter Kontext. *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 73, special issue, 1999, S. 115-161. とくに後者の伝記的研究については、本稿で大いに参考にしてている。
- 2) 'Application for admission as a Probationer-student for the Degree of Bachelor of Letters, or as a Student for the Degree of Bachelor of Science, or as an Advanced Student.' In: The Duke Humfrey's Library, the Bodleian Library, University of Oxford, *The Reports of the Board of the Faculty of Literae Humaniores 1934-1936* (reference code FA 4/7/2/6)
- 3) The Duke Humfrey's Library, the Bodleian Library, University of Oxford, *The postgraduate student file for Theodor Adorno* (reference code FA 10/1/57), Oxford University Archivs, Board of the Faculty of Literae Humaniores, Mappe "Wiesengrund-Adorno, Merton, D.Phil." 元々この文書に表題はない。
- 4) Theodor W. Adorno, Die Transzendenz des Dinglichen und Noematischen in Husserls Phänomenologie. In: *Gesammelte Schriften*. Band 1, hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1973, S. 7-77.
- 5) アドルノの学位論文とフッサール、コルネリウスとの関係については、拙論「現象学のアンチノミーと理念としての全体 ——アドルノのフッサール論、媒介者としてのコルネリウス」、『現象学年報』23、2007年、99-107頁、および Phenomenological Antinomy and Holistic Idea — Adorno's Husserl-Studies and Influences from Cornelius. *INVESTIGACIONES FENOMENOLÓGICAS*. Monográfico 4/II, 2013, pp. 23-38 において詳しく論じている。
- 6) Vgl., The Radcliffe Science Library, Bodleian Libraries, University of Oxford, Ms SPSL 322/2.
- 7) Theodor W. Adorno, Die Aktualität der Philosophie. In: *Gesammelte Schriften*. Band 1, hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1973, S. 325-344.
- 8) Theodor W. Adorno, Die Idee der Naturgeschichte. In: *Gesammelte Schriften*. Band 1, hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1973, S. 345-365.
- 9) Vgl., Susan Buck-Morss, *The origin of negative dialectics : Theodor W. Adorno, Walter Benjamin and the Frankfurt Institute*. New York, 1977, etc. とくに意味概念をめぐるアドルノの主張とベンヤミンからの影響に関しては、拙稿「暴力と和解の星座 —— Th・W・アドルノの思想を手がかりに——」、『暴力と人間存在』、筑摩書房、2008年、

335-355 頁を参照。

- 10) アドルノは同じ主題を、同年3月1日付の書簡でE・クシェネクに宛てて (AKB. 61)、7月5日付の書簡でS・クラカウアーに宛てて (Theodor W. Adorno und Siegfried Kracauer, *Briefwechsel 1923-1966*. hrsg. v. Wolfgang Schopf, Frankfurt am Main, 2008, S. 316) それぞれ伝えている。
- 11) 実際のところ、アドルノが学位論文で依拠していたコルネリウスの哲学にたいして、フッサールは心理学主義の一例として厳しく批判している。Vgl., Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*. (1901) hrsg. v. U. Panzer; *Gesammelte Werke*. BandXIX/1, Haag, 1984, S. 211ff.
- 12) ただし、本稿で取り上げるイギリス滞在期間のアドルノの現象学研究において、ホルクハイマーからどの程度影響を受けていたかについては、議論の余地がある。本文後述参照。
- 13) アドルノは同年11月12日付の書簡で次のように述べている。「今は主に『形式論理学と超越論的論理学』に携わっています。それはフッサールの書いたなかでもいちばんおもしろいものだと思いますし、たぶんいちばん重要なものだと思います。もちろん、この著作は現象学の自己止揚を示しています。けれどもそれは、おのずから達せられるべき真理の一契機なのです」(AHB1. 92-93)。
- 14) ところで、前章で指摘したように、アドルノは歴史哲学的な観点から論文を構想していた。だが前述の書簡の発言からは、そのような観点は影を潜めている。つまり彼は当初歴史哲学的観点から研究するという構想を抱いていたが、実際の研究・執筆作業では、フッサールの論理学的問題に関する研究を先行しておこなっていたのである。ただしそれは、アドルノの歴史哲学的な観点や、いわゆるマルクス主義的な観点が、まったくなくなったということを意味するのではない。後年出版される『認識論のメタ批判』では、むしろこれらの観点が積極的に導入されているからである。したがって、当初論文を構想し始めた段階では、それらの観点が打ち出されていたが、実際の執筆作業は別の方向で従事することになった。そしてその後、ふたたびそれらの観点が前面に出てきたと考えられるのである。ちなみに、本稿で取り上げたアドルノの書簡からは、ホルクハイマーの立場に同調する発言が見出される。ホルクハイマーをはじめとする社会研究所のメンバーがアメリカに移住してゆくのにたいして、アドルノはひとりイギリスに移り住んだ。この移住先の相違が、ふたりの間に意見の齟齬や誤解を生んでいた。それがアドルノに同調の態度を取らせたと考えられる。その一方で、残されているこの時期の討議録においては、ふたりの見解の相違が見受けられる。このことからすれば、アドルノの態度がどこまで彼の本心だったのかについては、なお検討の余地がある。つまり、海を隔ててやり取りされる書簡のなかでは同調の態度を示しつつも、アドルノ自身の問題意識や見解は、ホルクハイマーとかならずしも一致



していなかったと考えられるのである。

- 15) 'Application for change of subject. B. Litt., B. Sc., or Advanced Student.' In: The Duke Humfrey's Library, the Bodleian Library, University of Oxford, *The Reports of the Board of the Faculty of Literae Humaniores 1934-1936* (reference code FA 4/7/2/6)
- 16) Gilbert Ryle, Heidegger's 'Sein und Zeit'. CP1. pp. 197-244; Phenomenology. CP1. pp. 167-178. ライルが現象学に関して最初に取り上げたのは、1927年の書評「インガルテン『本質への問い』」である。その後、本文で取り上げた書評と講演を発表するが、以降ライルが現象学を論じることは大幅に少なくなる。
- 17) フッサール自身、『論理学研究』第一巻においては「純粹論理学と認識論の新たな基礎づけ」(Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Erster Band. Prolegomena zur reinen Logik.* (1900) hrsg. v. E. Heidegger; *Gesammelte Werke.* Band XVIII, Haag, 1975, S. 7) を目指していた。ライルは、このようなフッサールの取り組みに関心を示していた。ただし、フッサールの考える純粹論理学は、アプリアリな原理を扱う学問であり、本文後述のように、これがライルの理解と合致するとは、かならずしも言えない。
- 18) ライルはこの「対格 (accusative)」という語について、英語にはドイツ語の「Objekt にたいする Gegenstand のような別の表現がないので、文法から隠喩を拝借している」(CP1. 203) と述べている。
- 19) この独我論だというライルの指摘にも、対象概念の場合と同様に注意が必要である。フッサールは意識概念・自我概念を、超越論的な概念として理解している。現象学は意識の志向的体験を分析するが、それは意識の志向性もその相関者である志向的对象も反省的に探究するものである。その際、個々の意識だけでなく、その志向的相関者である対象も包括するようにして探究される。これはある意味で独我であるが、超越論的な独我である。これにたいしてライルの指摘は、あくまで個別的な意識概念・自我概念を念頭においた批判だと思われる。
- 20) ライルは講演「現象学」と同年に、論文「系統的に誤解を招く諸表現」を発表しており、講演にもその影響が見出される。この講演以降、ライルの関心は現象学から離れてゆくの、講演が現象学にたいするライルの決別を意味していると解釈できる。だがライルは、書評においても講演においても、現象学を全否定しているわけではなく、とくにフッサールの論理学の構想には肯定的に理解している。
- 21) Theodor W. Adorno, Zur Philosophie Husserls. In: *Gesammelte Schriften.* Band 20, hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1986, S. 46-118.
- 22) 「フッサール・ブック」については、詳細な分析が必要であるが、それについては稿をあらためて論じることにしたい。また論文「フッサール哲学について」に関しては、拙論「内在的批判への道程 ——アドルノのイギリス滞在期間におけるフッサール研究——」、『現象学年報』27、2011年、97-104頁を参照。

- 23) フッサールにおいてカテゴリー的直観とは、感性的に知覚されるのでない「命題形式そのものを形成する意味の諸契機——カテゴリー的形式の諸契機」(Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*. (1901) hrsg. v. U. Panzer; *Gesammelte Werke*. BandXIX/2, Haag. 1984, S. 658) を充実させる方法である。そしてそれは「たんなる感性的知覚が素材的な意味要素にたいしておこなうのと同じはたらきを、カテゴリー的な意味要素にたいしておこなう作用」(S. 671) のことである。
- 24) フッサールの現象学における独我論の問題をさらに論じるには、他者経験論についての議論が不可欠である。これについては、アドルノの見解との比較とともに稿をあらためて論じることにしたい。

### 文献および文中略号

(引用文は拙訳であるが、邦訳があれば適宜参照している。)

Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften. 20 Bde.*, hrsg. v. Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1970-1986 (GS と略記、全集版の巻数と頁数を表記)

Theodor W. Adorno, [Husserlbuch]. Typoskript im Theodor W. Adorno-Archiv, Frankfurt am Main, 1934-1937, 02959-03399 (TS と略記、頁数を表記)

Theodor W. Adorno und Ernst Krenek, *Briefwechsel*. hrsg. v. Wolfgang Rogge, Frankfurt am Main, 1974 (AKB と略記、頁数を表記)

Theodor W. Adorno und Max Horkheimer, *Briefwechsel 1927-1969. 4 Bde.*, hrsg. v. Christoph Gödde und Henri Lonitz, Frankfurt am Main, 2003-2006 (AHB と略記、巻数と頁数を表記)

Theodor W. Adorno und Walter Benjamin, *Briefwechsel 1928-1940*, hrsg. v. Henri Lonitz, Frankfurt am Main, 1994

Gilbert Ryle, *Collected papers. vol. 1. Critical essays*, London, 1971 (CP1 と略記、頁数を表記)